

事例研究報告

小学部高学年児童における 教員に要求を伝えるための指導

児童・生徒の実態

- 小学部 6 年児童
- 知的障がい
- コミュニケーション
 - 受容：身体的支援を受けて，教員と一緒に日課に取り組むことができる。
 - 表出：ほしいものがある時に手を伸ばして取ろうとすることができる。
したくないこと等に対して手を振る等して拒否を示すことができる。

保護者の願い

- ・自分から手を出し，選択できるようになってほしい。
- ・周りの人に協力を依頼できるようになってほしい。

教員の願い

- ・ほしい物やしたいことについて教員と児童で共通したサインを見つけていきたい。
- ・自分の思いを相手に伝える方法や手段を学んでほしい。

アドバイザーからの助言

- 本児の要求に関する実態把握を行う。
 - ・うちわ（好きな物）を手の届かない位置に提示し、どのような様子を示すか観察する。
 - ・うちわと似た形で興味がないものの具体物や写真カードを提示し、実態把握のための記録をとる。



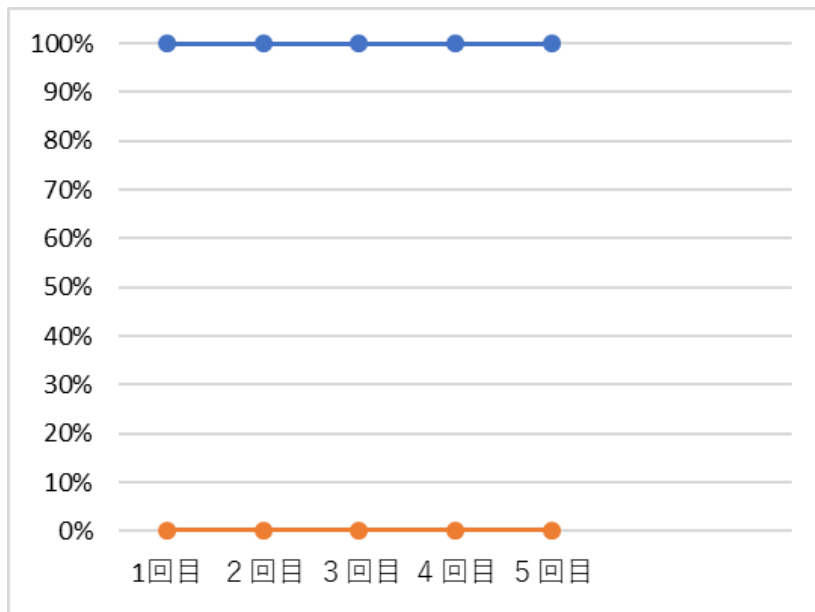
- 本児の実態把握を行った上で、ターゲットとする課題を設定してはどうか。

★助言を受けて★

AIPACの俯瞰図より『オリジナル課題』を選択し指導を行うこととする。

助言を受けての実態把握

- 好きな物（うちわ）と似た形で興味のない物（ひしゃく）の2つを具体物で提示し，記録をとる。



- : うちわを選択できなかった
- + : うちわを選択できた



- 具体物ではうちわを選択することができたため，「写真カードを2枚提示し，うちわを選択する課題」に取り組むこととした。

指導目標

2枚の写真カード（うちわ・ひしゃく）を提示し、好きな物のカード（うちわ）を選択することができる。

指導の手続き

- ① 2枚の写真カードを提示し、「うちわどっち？」と声をかけ、数秒間様子を見守る。
- ② うちわカードを選択することができれば、うちわ（実物）を手渡し、遊ぶ様子を見守る。
- ③ 選択する様子が見られない場合やひしゃくカードを選択する場合は中断し、再度①から開始する。
- ④ 遊びを終了する合図として、カウントダウンをしてうちわを教員に手渡すよう伝える。
- ⑤ ①から④の手続きを4～6試行繰り返す。

選択する写真カード



強化子とした具体物

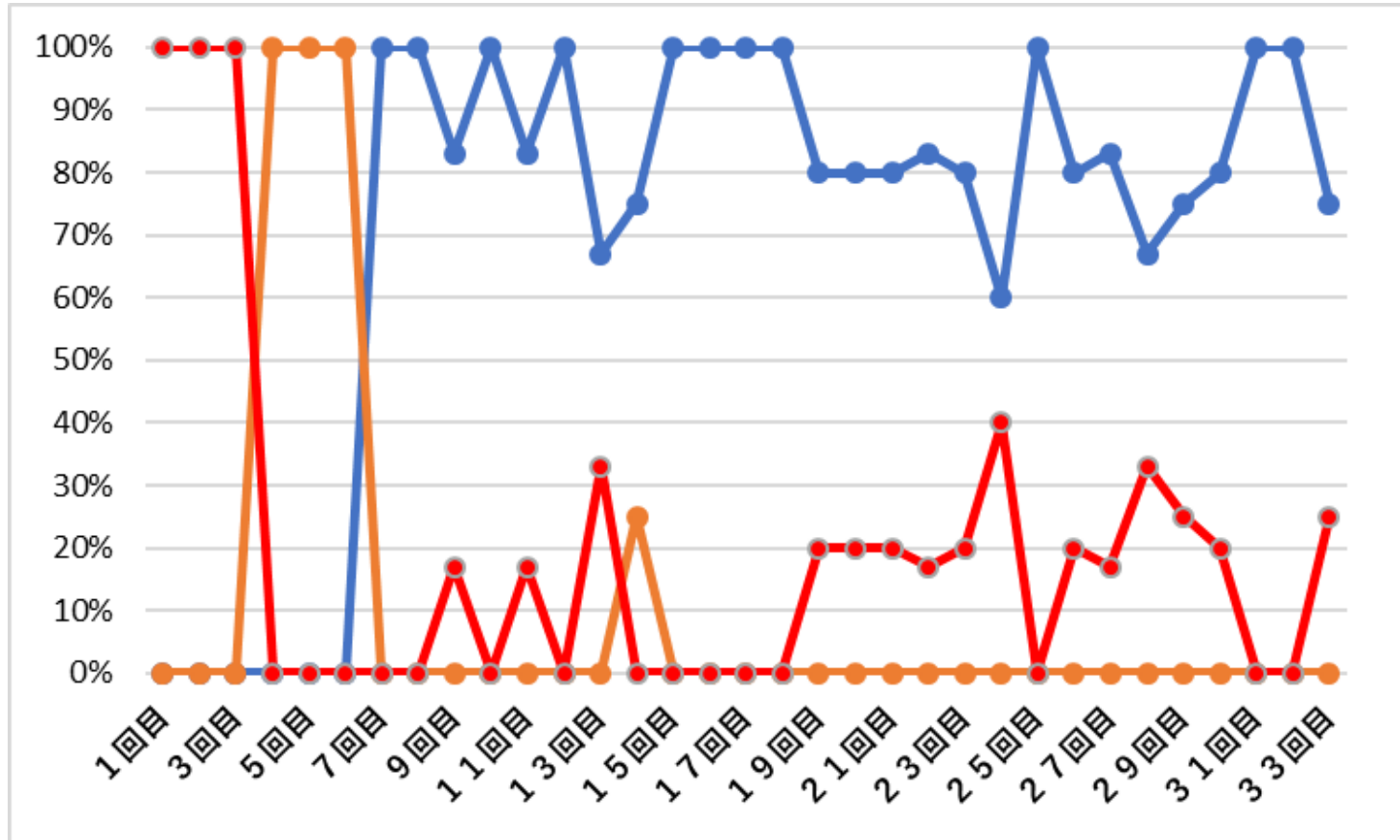


うちわ



ひしゃく

結果



- - : うちわを選択できなかった
- P : うちわカードを児童の近くに提示する
- + : うちわを選択することができた

考察

- うちわカードをひしゃくカードよりも本児の近くに提示すると、うちわカードを取ることができた。
- 同じ位置に写真カード2枚を提示すると、うちわカードを選択する場合もあるが、ひしゃくカードを取る場合や数秒間様子を見守っても反応がない場合がある。
- 「うちわを選択することができた」が60～80%であったが、選択肢が2つしかないので、これが要求を伝える指導に繋がっているのか判断しづらい。

アドバイザーからの助言

○「要求を伝える」ことに、より重点を置いた課題設定にする。

- ・取り組んでいる課題が「要求を伝える課題」より「名詞を聞き分ける課題」に近い場合、要求により焦点をあてた課題に取り組んではいかがでしょうか。
- ・課題内容は、写真カードではなくうちわ型に切り抜いたカードや袋に入ったうちわを教員に手渡して「開けて」を要求する等。
- ・教員が指導を行う中で感じた「要求を伝える指導に繋げることができているか分からない」ということについては、その感覚を尊重することが重要。



- ・ケースに入ったうちわを教員に手渡して「開けて」の要求を伝える指導に取り組むこととする。

ステップ1

指導目標

「ちょうだい」の言葉かけを受けて、ケースに入ったうちわを教員に持って行くことができる。

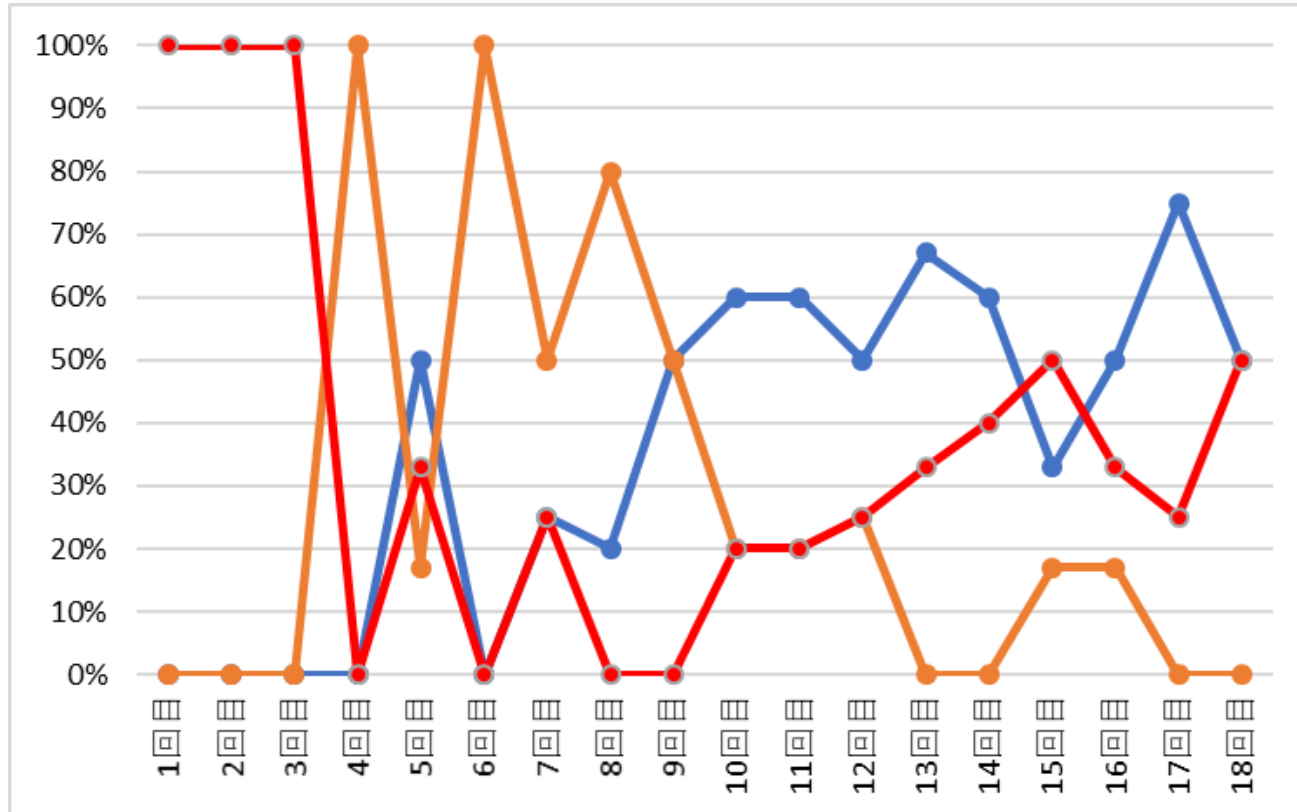
指導の手続き

- ①ケースに入ったうちわを本児に手渡し、2～3歩離れる。
- ②教員の「ちょうだい」の言葉かけを聞いてケースを教員に持って来ることができれば、ケースからうちわを取り出し、渡す。（本時が遊ぶ様子を見守る。）
- ③うちわを持ってくる様子が見られなければ中断し、再度①から開始する。
- ④カウントダウンをしてうちわを教員に手渡すよう伝える。
- ⑤①から④の手続きを4～6試行繰り返す。

ケースに入った強化子



結果



- ー : うちわを教員に持って行くことができなかった
- P : 肘を支える支援を受けて, うちわを持って行くことができた
- + : うちわを教員に持って行くことができた

今後の指導の流れ

ステップ1（現在）

- ・「ちょうだい」の言葉かけを受けて、ケースに入ったうちわを教員に持って行くことができる。



ステップ2

- ・プロンプターからの背中タッチを受けて、ケースに入ったうちわを教員に持って行くことができる。
※言葉かけの支援はしない



ステップ3

- ・ケースに入ったうちわを教員に持って行くことができる。

～実践を通して～

- 目標を設定する前に児童の現在の実態を把握し，標的となる行動を検討することが大切であると感じた。
- 児童に身につけて欲しい力に，より焦点を充てた課題設定を行うことの重要性を実感した。
- 記録を取ることで，支援がうまくいっているか，標的行動が妥当であるかについて振り返ることができた。
- どこにつまずきがあるのかを様々な角度から捉えることが大切であると感じた。